豪雨災害

「未明から降り出した雨は、わずか三時間あまりで降水量二五七・五ｍｍに達する記録やぶりの集中豪雨となり、町の中心を流れる小又川は、山手の水をあつめ、町の外側を流れる山王川とともに一気に町を水没させ、一瞬にして各地は濁流の孤島と化した。鉄砲水の暴威は、交通、通信ともにズタズタにし、国鉄七尾線穴水ー輪島間と同年六月に開通した能登線穴水ー鵜川間は、一四六カ所が土砂崩れや線路同床流水し全くの麻痺状態となった。この未曽有の大水害による町の罹災者は、二七八六世帯、一万一〇〇〇人を超え、被害総額二〇億円を超す大災害となり、五人の尊い命を奪うことになった」

これは、昭和34年8月26日の集中豪雨による穴水町の水害の様子を記した「穴水町十年史」からの引用です。

令和6年奥能登豪雨による輪島市の3時間雨量最大220ミリと比較すると、今回の輪島市と同程度の雨が穴水町に降ったことになります。当時は災害に対する備えや被災者への支援については、現在ほどインフラや制度が確立されていなかったと思われ、それだけに復旧・復興には厳しい道のりであったと想像できます。

そんな中、昭和39年から5年間をかけて小又川の大改修が行われ、現在の役場庁舎の前の新小又川となりました。穴水湾への新放水路として、毎秒120トンの通水能力となり、1時間あたり30ミリの集中豪雨にも耐えられるように作られました。当時の町の公共工事としては異例の巨額を投じた大事業だったと聞かされています。今回の豪雨災害では、この新小又川が穴水町を守ってくれたのではないでしょうか。創造的復興とはかくあるべし。

改めて、今回の豪雨災害で犠牲になられた方のご冥福をお祈りいたします。

穴水町長　吉村 光輝